氏　　名　蔦（つた）　清（きよ）　行（ゆき）
学位(専攻分野)　博　士（文　学）
学位記番号　文　博　第 384 号
学位授与の日付　平成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件　学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻　文学研究科文献文化学専攻
学位論文題目　形容詞の活用をめぐる問題

論文調査委員　（主査）教授 木田章義　教授 大谷雅夫　助教授 大槻　信

論文内容の要旨

第一篇

第一章 「ミ語法研究略史」

ミ語法の研究史についてまとめる。

ミ語法についての研究の積み重ねの中では，(a)ミ語法には原因・理由の意味が読み取れるが，それはなぜか。そもそも原因・理由の意味を読み取ってよいのか。(b)ヲはどのように位置づけるべきか。(c)ミ語法は形容詞性のものなのか，それとも動詞性のものなのか（マ行四段動詞との関わりはどのようなものか)。というようなことが問題となってきた。そして最近では，ミ語法はもともと，ある対象に対する主体の評価・判断を表す語法であり，原因・理由の意味は文脈上読み取られるものであること。ヲは格助詞であり，評価・判断の対象を表すものであること。形容詞であるか動詞であるかは判じがたいが，少なくとも評価・判断を表すという意味での動詞性であれば認めることができること，などが明らかになってきている。

第二章 「ミ語法の表記と意味」

万葉集のミ語法には，特殊な用字が見られる。通常，ミ（甲類）という音節を表すために，「見」という文字を用いることは殆どないが，ミ語法のミにだけはそれが集中的に見られるのである。ミ語法のミを表す文字は「見」が最も多く，逆に訓仮名としての「見」が最も多く用いられるのも，ミ語法においてである。このことから，ミという語尾は「見る」という語と意味上の関わりを持っていたのではないかと思われる。

このことから，ミ語法のミは主体の判断を表す「見る」と関連づけて，ミ語法も同様に判断を表す働きが本来のものであったと考えるべきではないか。ミ語法句は，形の上から，ミ語法部分の上にヲを取るもの（ヲのミ語法）と，ヲを取らないもの（無助詞のミ語法）とに大別できるが，これは，その上接する名詞句とミ語法句との関係の違いが表れたものと考えることができる。ヲを取るものはミ語法の持つ主観的判断の意味との関わりが強く，無助詞のものは形容詞的意味の部分との結びつきが強いが，根本において両者は共通する性格を持つものである。

ミ語法が語源的に「見る」という語から発生したものであるかどうかは，はっきりとは分からない。ただ，少なくとも表記者にはそのように意識されていたものと思われる。

ミ語法は判断を表す働きが本来のものであったが，その主観的判断が弱まって，客観的表現に転換する例も見られる。またミ語法句にしばしば見られる原因・理由の関係は，あくまで文脈上読み取られるものであって，本来の意味とは異なるレベルにあるものと考えられる。

第三章 「ミとミト」

ミ語法の後にトが接尾した，「ミトの形」について考える。

ミトの形は，＜主観的判断＞・＜原因・理由＞・＜客観的形容＞の用法を持つ点で，ミ語法に類似すると言える。

ミトの形のトは，オモフ・イフなどの引用動詞に続くことがなく，通常トが承けることのない，後に続く用言の形式を承

けるという点で，引用のトとは異なった性質を持っている。またミ語法部分は，属性形容詞が用いられる場合，上に必ずヲを取り，これは，第二章に見たような普通のミ語法とは，異なる現象である。

これらをふまえて考えると，ミトの形は基本的には＜主観的判断＞を表すものであったと考えられる。またトは，ミ語法部分を内容として引用していると言うよりも，＜主観的判断＞であることをより明瞭に示す，語尾的なものと位置づけることができる。このような性質を持つために，ミ語法とミトの形とは非常に似通った用法を持つのである。なおヲも，判断の対象（焦点）を示すはたらきを持つという意味で，主体の判断にかかわる要素と考えてよいであろう。属性形容詞のミトの形において，必ずヲが用いられているのは，トを取ることによって強めた＜主観的判断＞の意味を，いわば補強するためと思われる。

さらに，特にヲについて考えると，ミ語法においても，ヲの有無は意味に違いをもたらしていたと考えられるのではないだろうか。＜主観的判断＞の強さの順に並べれば，「無助詞のミ語法」よりも「ヲのミ語法」の方が意味を強く持ち，さらにミトの形がよりいっそう強い，ということになろう。それを通時的な変化として置き換えられるかどうかまでは分からないが，もしそう考えることができるとすると，ミ語法は，時の流れとともに希薄になって行く＜主観的判断＞を，より明瞭にするような形態へと変化していった，と言うことができる。

第四章　「形容詞とオモフ」

上代においては，形容詞が「オモフ（オモホユ）」の内容を表す，「ミ語法＋オモフ」「形容詞連用形＋オモホユ」という形式がある。この二つの形式は，いずれも用いられる形容詞が情意形容詞にほぼ限られること，動詞の形に偏りがあること（ミ語法に対しては専らオモフが使われるのに対し，連用形に使われるのは殆どがオモホユである）の二つの点で，よく似た関係にあると言うことができる。

これらの形式は，情意形容詞自体に含まれる主観性をより明瞭に表すために，オモフ・オモホユという動詞を付加したものと考えられる。ミ語法＋オモフの形式において，オモフの主体が明示されるときは，多くの場合オモフの直上という決まった場所に現れるという現象が見られる。これはオモフと内容と主格とが対等の関係で文を構成するのではなく，オモフが内容に対して従属的であり，主格を表す語はオモフに対して従属的であるという関係から起こった現象と思われる。

ミ語法に結びつくのが専らオモフであり，連用形と結びつくのがオモホユであるということからは，ミ語法と連用形との，対象に対する接し方の違いを窺うことができるのではないか。すなわち，オモホユと結びつく情意形容詞の連用形は，非意志的・自発的なものであり，オモフと結びつく情意形容詞のミ語法は，それに対して，意志的・能動的な表現であったのではないかと考えられるのである。

いずれにしても，上代におけるこれら二つの形式は，内容と思考動詞という風に截然と分けて考えることはできず，それらが一体になって形作られた，総合的な表現であると考えられる。

第二篇

第一章　「コソ・已然形研究略史」

コソによる係り結びと，已然形単独用法についての研究史をまとめる。

コソの係り結びについての研究は，石田春昭氏・大野晋氏によって大きく進展した。その後の研究は，何らかの形でそれを批判・継承するものであるが，そこで主な問題となってきたのは，(a)已然形単独用法を，後に接続してゆくものと考えるか，それともそこで断止するものと考えるか，(b)コソの持つはたらきや，そのはたらきと已然形部分との関係を，どのようにとらえるのか，という二点である。このうち已然形の単独用法については，もともとそこで断止すると考えられることもある。しかし本論文では，本来は後に続いてゆくものであって，それが終止する位置に用いられる場合には，後に続くべきものが示されないことによる余韻が生ずると考えるのがよいように思う。またコソの特質は，あるもの・ことを取り立てると同時に，それと対比されるものを暗示するところにあったのではないかと考える。

第二章　「終止のコソ」

終止用法のコソには，ほかの係助詞と同様，単独で文末に現れて，上接の語に述語の資格を持たせる働きがあるようである。そのような働きのために，いわゆる複文のように二つの句が並ぶ表現において，注釈的に前句の理由を表すはたらきをすることがある。ところがその終止用法のコソの例の中には，どのようなことがらの理由になっているのかが，言葉の上か

らははっきりと読み取れない例が見られる。それは，コソ自身に，その取り立てているもの・ことと対比的に捉えられるもの・ことを想起させるはたらきがあるからである。例えば「今こそ」という時には，それと対比的に捉えられることとして「昔」ということが言外に含まれている。ハにもそのような機能があるが，コソのそれはとりわけ強いのである。どのようなことがらの理由になっているのかがはっきりしない例は，その言外に暗示されるもの・ことに対しての理由になっている，と見なせるのである。終止用法のコソのうち，ほかの係助詞に類例を見いだせないものは，このようなコソの対立的な取り立てが強く働いたものと考えてよいであろう。

このように考えると，コソは，終止用法として文末に用いられるという，ほかの係助詞と同様の性質を持つ一方，対立的な取り立てのはたらきを担うという，コソ特有のはたらきをも持ち，そのために，形の上でも，他の係助詞の類型には当てはまらない側面が見られるのである。

第三章 「係りのコソ」

コソによる係り結び文の中には，結びが体言であるものが見られる。特に上代における，コソと体言の係り結びでは，体言であるにもかかわらず，意味上，そこから後に続いてゆくものが見られる。体言で結ぶものは，従来，下にナリなどが省略されていると考えることが多かったのだが，単純に省略と考えては，このような意味上後に続いてゆく形を説明することが難しい。

このようなコソと体言との関係は，コソが，特に上代においては，「A コソ B，非 A ハ非 B」という対立関係の構成と強く結びついていたことから，考えるべきであろう。すなわち，その構成を喚起する力が非常に強かったために，文法上後に続くはたらきを持たない体言が結びとなったときにも，意味の上では，逆接で後続してゆくのだと思われる。

上代では，コソの結びが形容詞の場合，その形容詞が已然形ではなく連体形を取ることが知られているが，この場合の連体形も，通常後に続くことがないにもかかわらず，意味の上で後に続く場合がある。体言の結びの場合について考えたことを思い合わせれば，これもまた，「A コソ B，非 A ハ非 B」という対立関係との結びつきによって可能となった現象であろう。

以上のように考えてくると，コソの結びが動詞已然形の場合に見られる対立関係も，已然形がその関係を支えているのではなく，主にコソの持つはたらきによって成立していると考えるのが自然であろう。已然形の結びは，それらの対立する二つの句（「A コソ B」と「非 A ハ非 B」）とが，逆接で続いている関係にあるため，その続く関係を示すのにふさわしい活用形が選ばれているのだと思われる。

体言で結ぶ形や，形容詞連体形で結ぶ形は，言うまでもなくソやカなど，他の係助詞にも見られるものである。しかしコソの場合は，それら他の係助詞に比べ，（後に続いてゆくという）意味の面で異なっている。また動詞已然形で結ぶ形は，連体形で結ぶ他の係助詞とは大きく異なるものである。そしてこれらの異なりはいずれも，コソが対立的な取り立てのはたらきを持ち，「A コソ B，非 A ハ非 B」という対立関係の構成と強く結びついているということから，説明できる。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

形容詞は活用が発達してゆく過程がたどれる品詞で，活用の成立についての考察には重要な位置を占めるが，形容詞の活用がどのようにしてできあがってきたかについては，まだ結論は出ていない。本論文は，その活用の成立の究明の第一歩として，第一篇で，「山を高み」のような「ミ語法」を考察した。本論文は，ミ語法のミの表記に，「見」という万葉仮名が使用されていることに気づいたことが，大きな転回点となった。「見」のように正訓字として頻用される文字は，通常，訓仮名として用いられることがない。この点から，少なくとも万葉時代には，ミ語法のミが「見」という漢字で表記してもおかしくないという語感をもたれていたことを表す。これまで見落とされていたこの事実から，「玉匣　おおふをやすみ　明けて去なば　君が名はあれど　我が名し惜しも（万葉集 No. 93）」なら，「覆い隠すことは簡単と見て（思って／判断して）」という意味になると推定した。これまでの解釈は，文法的な整合性や文脈に依存していたために，大きな揺れがあったが，「見る」との関連で解釈することによって，これが万葉時代の理解に最も近い解釈と判断される。これを基礎に分析を始め，ミ語法の「主観的判断」「客観的形容」「原因・理由」の三種の意味の中，主観的判断が基本の意味であり，時代とともにそれが弱くなって，平安時代になるとほとんどが「原因・理由」の意味になってしまったことを論じる（原因理由を表すのは

客観的見方が背景にある)。主観的判断の意味が弱まるにつれて,「山高み」に「を」を加えて「山を高み」,さらに「と」を加えて「山高みと」,さらには「を」と「と」の両方を伴う「山を高みと」という順に,弱まった主観的判断を補塡していったとする。この順番通りに変化したのかは確定的ではないが,微妙な構文的相違・意味の相違を捉えた好論である。そしてヲは判断の対象を示し,ヲの無いものは形容詞と主述関係になるという違いを発見し,これに基づき,「腰細」のような「名詞＋形容詞語幹」の複合名詞が,主述関係の意識が強くて複合名詞化しにくかったことなども明らかにしている。また同趣の表現である「形容詞＋ト＋見る」「形容詞＋ト＋思ふ（言ふ)」の構文と比較することによって,「ミト」のトが,引用のトとは違った性質を持っていること,これがトの来源の違いである可能性があること,また「ミ語法」の場合は「思ふ」,「形容詞連用形」の場合には「思ほゆ」と表現される現象を指摘し,ミ語法が主観的判断を示すという論者の主張を補強している。随所に統計表を提示して論の基盤を確定させつつ論じる手法は,論を手堅いものにしている。

第二篇では,終止用法のコソの存在を確定し,コソには対立的な取り立ての働きがあって,「A コソ B（ダガ),非 A ハ非 B」という対比構造を背景にもっているために,「B」や「非 A」などが省略されても,意味が了解されること,そしてそれは「B」などの省略と考えるのではなく,その対比構造を基盤に了解される意味で,表現する必要がなかったものと主張する。他の係助詞との違いや一致点など,細部に渡る考証があり,係助詞の性格をあきらかにしたのは大きな成果と評価できる。「コソ―已然形」の係結構造でも,この対比構造が背景となっており,他の係助詞の用例との比較から,コソの意味をさらに明確にした。已然形と呼応することについては,已然形が次の句に続く形であるから,対比構造の表現にはふさわしかったと推定する。

大量の先行文献があって,煮詰まってしまったと思われていた上代語の文法研究であったが,本論文は,主題とした現象だけでなく,その周辺の類似の表現や言語現象にも目を配った精細な議論によって,新しい展開をもたらしたと評価できる。ただ,「コソ」・「コソ―已然形」については,ミ語法に比べて関係するところが広いため,本論文の結論が,正しいのかどうか,修整すべきところがあるかどうか,これからも検討してゆかねばならないだろう。

以上,審査したところより,本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2007年 1 月 9 日,調査委員 3 名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果,合格と認めた。